

10. 小児急性白血病に対する同種骨髄移植 に関する治療研究

伊勢 泰*¹, 大平睦郎*¹, 高山 順*¹,
花田 基*¹

〔目 的〕

非リンパ性白血病の予後は依然として不良であり、国立がんセンターにおける50%生存率は、2年を越えるが3年を越えて生存する例は少なく、5年以上の長期生存例は得られていない。このために、長期生存が期待できる同種骨髄移植を、条件のととのった症例に適用して治癒を企図した。

〔方法および対象〕

国立がんセンター小児科で、これまでに同種骨髄移植を施行したのは、AML 4例とALL 1例の計5例である。FAB分類ではM1が2例、M2、M6各1例とL1が1例である。年齢は11歳から19歳（中央値14歳）、性は女児4例、男児1例。移植時期はAMLは全例初回寛解期で、ALLは再寛解期であった。DonorはすべてHLAが合致し、MLC陰性の同胞を選んだ。移植前処置としては、EXの大量投与（120mg/kg）と、12Gyの6日間分割全身放射線照射を行った。感染予防には水平層流式無菌室に隔離し、非経口抗生剤（PVN）による腸内殺菌を併用した。また、移植後のGVHD予防には、MTXをSeattle方式に準じて投与した。

〔成 績〕

移植した骨髄有核細胞数は $3.1\sim 4.8\times 10^8/kg$ で、Day25~42（中央値Day33）に全例、生着した。

移植後早期合併症としては、口腔粘膜炎および軽度下痢がすべてに認められたが、EXの副作用

としての出血性膀胱炎は経験されなかった。これには持続膀胱灌流およびMESNAによる予防措置の効果と考えられた。

皮疹、下痢、肝障害をTriasとして出現するGVHDは、Thomasの分類でGrade 0~1が3例、IIおよびIVが各1例見られた。

AML 4例中1例はGVHDが重症化し、肺炎および敗血症合併のためDay102に死亡した。しかし、他の3例は移植後それぞれ28カ月、18カ月、15カ月経過するも、無治療で完全寛解を続けており、Performance statusもKasnofsky scoreで100%と良好で、長期生存が期待できる。ALL例は移植4カ月後に胃壁に腫瘤形成し、局所再発したが、外科的に腫瘤を摘出し、現在再度化学療法中である。

〔結 語〕

同種骨髄移植を適用した完全寛解期の急性白血病5症例中、1例がGVHDのために死亡、1例が再発加療中であるが、他の3例は異常なく学校生活を送っており、治癒が期待できる。

非リンパ性白血病およびリンパ性白血病の中で、予後不良と考えられる症例に対しては、現時点では条件が整えば骨髄移植が最も有効な治療手段と考えられる。

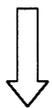
§ 文 献

- 1) Ohira, M. et al: Successful allogeneic bone marrow transplantation for three children with acute nonlymphocytic leukemia. Jap. J. Clin. Oncol., 14 (suppl.): 487, 1984.

* 1 国立がんセンター病院小児科



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

非リンパ性白血病の予後は依然として不良であり,国立がんセンターにおける 50%生存率は,2年を越えるが3年を越えて生存する例は少なく,5年以上の長期生存例は得られていない。このために,長期生存が期待できる同種骨髄移植を,条件のととのった症例に適用して治癒を企図した。